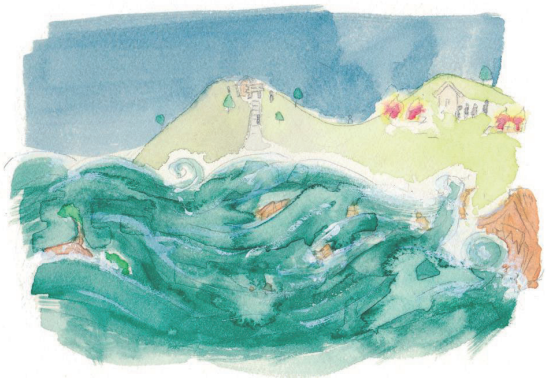
「稲むらの火」

多読レベル３

大切な「いなむら」（刈り取った稲）に
火をつけた儀兵衛。
何がおきたのでしょう。



実話　１

目的：防災を考える。津波の怖さを知る。

指導者の皆さんへ

ジャボラNPO　リライト本の目的

①多読による、学習者の自己学習の推進

②外国人が理解しにくい日本人の心情や考え方、日本文化を学んでもらう

『多読表』を書こう

これは、学習者の振り返り記録です。（ポートフォリオ）別紙

①何冊読んだのか（多読）記録します。

②おもしろさを三段階で評価します。（　😄😐😫　）

多　読　表

【○ぜんぶよんだ　△ぜんぶよまなかった】　【　おもしろかった　まあまあ　あまりおもしろくなかった】

レベル	Vol	タイトル	何月 何日	○△	感想	
ジャボラオリジナル	0	「いれて」				
	0	「わすれもの」				
	1	笠地蔵				
	1	舌切り雀				
	2	明日は遠足				
	2	お母さんヘンシン　～わたしは、時間を守るわよ！				
	2	稲むらの火				
	2	正直五兵衛				

この物語は、一八五四年、紀ノ國　広村、今の和歌山県　広川村にあった
本当の話である。
「いなむら」とは刈り取った稲のことである。

儀兵衛の家は、海と山の間の少し
高いところにあった。
海へ行く細い道の先には、下の村があった。
下の村には、草ぶきの古い家と神社があった。

秋の日の夕方、儀兵衛は祭りの用意をしながら、
田んぼを見ていた。
その年は多くの米がとれたので、にぎやかな
お祭りがあるのだ。
儀兵衛は、屋根の上にある大のぼりや
祭りの提灯や、神社の森を見ていた。
はっぴの若者が神社の方へ歩いて行った。

しかし、家には儀兵衛と十歳の孫の忠だけだ。
儀兵衛は、少し気分が悪かったので、孫と家にいた。
その日は秋なのに、少し暑かった。
下の村を見ていると、地震がおきた。
その地震は大きくなかったが、儀兵衛は、
今まであった地震と違うと思った。

地震が終わると儀兵衛は、下の村と海を見た。

海を見て、儀兵衛はびっくりした。
海は暗くなり、大きい波が動いていた。
また、下の村の人たちも、海を見てびっくりした。
海を見ていた村の人たちは海に走って行った。
いつもは見えない海の底が見えていた。
波はどんどん高くなり、砂の広場のような海の底が
現れた。

みんなは、どうしてなのか分からなかった。

儀兵衛も海の底を見るのは初めてだった。
しかし、儀兵衛が子どもの頃、父が海のことを話していた。
儀兵衛は海がどうなるか分かった。
儀兵衛は、忠が下の村に行く時間と山のお寺に行く時間と
どちらのほうが時間が、かかるか考えた。
儀兵衛は忠に言った。
「忠、忠。急いでたいまつに火をつけて持ってこい。」
たいまつは大雨の夜に使うために、どの家にもあった。

忠は急いで持ってきた。
儀兵衛はそれを持つと、家の下の田んぼに行った。
そして、儀兵衛は
「いなむら」に火をつけた。
すぐに火は大きくなった。
忠はびっくりして、
「おじいさん、どうした、どうした。
おじいさん。」
と大きい声で聞いた。

でも、儀兵衛はなにも言わなかった。
儀兵衛は四〇〇人の村の人のことばかり考えていたのだ。
忠は泣きながら、家の中に入った。
儀兵衛がいつもと違っていたので、
びっくりしたのだ。
儀兵衛は自分の家の最後のいなむらに火をつけた。
すぐに、山寺の鐘が鳴った。鐘の音といなむらの煙を見て、村の人たちは海の近くから丘へ丘へと上ってきた。

夕方になっても、波はまだまだ遠くへいった。

少しすると、村の人たちが火を消しに来た。

儀兵衛は、言った。

「火を消してはいけない。

みんなが、ここに来るんだ。」

若い男たちや男の子が来た。

元気な女たちや女の子も来た。

たくさんのおじいさんや

おばあさんも来た。

村の人たちは、どうして

儀兵衛が火をつけたのか、

わからなかった。

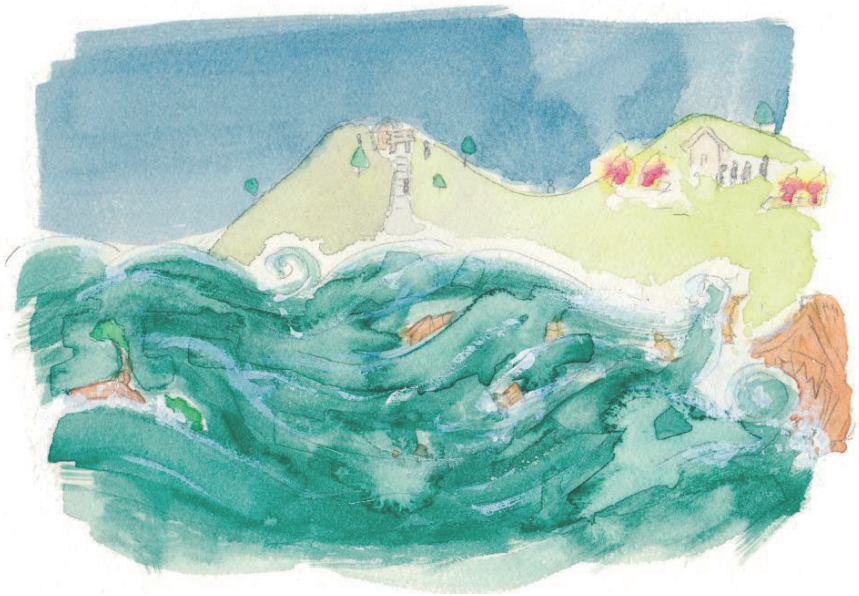
夜になると、

忠は泣きながら言った。

「おじいさんが火をつけた。
どうして…」
儀兵衛は
「火をつけたのはおれだ。みんな来たか。」
と言った。
村の人は言った。
「はい、みんないますが、どうしたんですか、
儀兵衛さん。」
「来た、見ろ、海を。」

遠くの海を見て、大きい声で叫んだ。
「来た。俺はわかっていたのだ。」
みんな海を見た。
遠くの海が細くて長い線だった。
それがどんどん太くなった。
そして、大きくなり、高くなった。
「津波だ！」
と村の人も叫んだ。
波が高くなり、大きくなり下の村の近くに来た。

とても大きい音と一緒に来た。
波は家よりも高く、ゴォーと音を出して、
何度も来た。
大きい波は、田畑の上に、そして、
神社の上に来た。
人々はその波を見て怖いと思った。
しかし、波は来ては帰り、来ては帰り、
だんだん小さくなっていった。



丘にいた村の人は　声がでなかった。
村の人は、黙ってじーっと下を見ていた。
「ない、ない、村もない、畑も田んぼもない。」
あるのは、ごつごつした大きい岩、すっと立つ絶壁だけだ。
草ぶきの家は、遠くの海の上に見える。人々はとても怖いと思った。全ての物をな
くして、悲しくなった。

「いなむらに火をつけたのは、津波が来ると思ったからだ。」
儀兵衛は言った。
「助かった。ああ、私たちは助かったのだ。」
みんな地面に座って泣いた。儀兵衛も泣いた。
そして、儀兵衛は言った。
「さあ、俺の家はみんなの家だ。お寺もある。
みんな、しっかりしなければ。」
「そうだ、そうだ、しっかりしなければ。」

それから、新しい村をつくった。
長い、長い時間がかかった。
しかし、少しずつ少しずつ新しい村はできた。
四年かかって、堤防もできた。
それは、儀兵衛の力があったからだ。

新しい村ができたとき、みんなは言った。

「ありがとうございます。ありがとうございます。儀兵衛さんのいなむら火のおかげでみんな助かりました。儀兵衛さん、高いところに、いなむらの火が見えたからです。」

村の人たちは儀兵衛の神社を建てた。そして、

「儀兵衛さんは神様だ。儀兵衛大明神だ。」

と言い、ずーっと忘れなかったのだ。

その後、何度も大きい地震があった。

しかし、儀兵衛のつくった堤防は、村と村の人を守ったのである。

【レベルについて　～大人編～】

◆本書は、ＮＰＯ多言語多読監修「にほんご多読ブックス」（大修館書店）のレベルに基づいて作成されています。

◆学習者がレベルに応じて、楽にたくさん読めるように、語彙や文法を制限してあります。

◆下の表が、「にほんご多読ブックス」のレベルの詳細です。

レベル	語彙	字数/1 話	主な文法項目
0 入門	350	～400	現在形、過去形、疑問詞、～たい　など ※基本的に「です・ます体」を使っています。
1 初級前半	350	400 ～1500	現在形、過去形、疑問詞、～たい　など ※基本的に「です・ます体」を使っています。
2 初級後半	500	1500 ～3000	辞書形、て形、ない形、た形、連体修飾、～と（条件）、～から（理由）、～なる、～のだ　など
3 初中級	800	2500 ～6000	可能形、命令形、受身形、意向形、～とき、～たら・ば・なら、～そう（様態）、～よう（推量・比喩）、複合動詞　など
4 中級	1300	5000 ～15000	使役形、使役受身形、～そう（伝聞）、～らしい、～はず、～もの、～ようにする／なる、ことにする／なる　など
5 中上級	2000	8000 ～25000	機能語・複合語・慣用表現・敬語など　例）～につれて、～わけにはいかない、切り開く／召し上がる、伺う

◎ＮＰＯ多言語多読については、ホームページをご覧ください。
http://tadoku.org/（「ＮＰＯ多言語多読」でも検索できます。）

この作品は、平成28年度文化庁委託事業によりNPO法人日本語教育ボランティア協会が作成しました。著作権は文化庁にあります。

提供元URL：http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/

挿絵：黒瀬　多喜代
再話・監修：ジャボラNPO

jabora ジャボラ NPO
特定非営利活動法人 日本語教育ボランティア協会